はじめに

1. 駅まちデザインとは

（1）駅まちデザイン、駅まち空間とは？ 1-1
（2）駅まち空間に求められるもの 1-2
（3）コンパクト・プラス・ネットワークの実現に向けた駅まち空間 1-3
（4）駅まちデザインの意義 1-4

2. 駅まちデザインにおいて意識すべきこと

（1）駅まち空間における公共施設・民間施設の一体的な活用 2-1
（2）駅まち空間の再構築が周辺市街地に与える影響への対応 2-5
（3）これからの時代に求められる新たな視点 2-9
（4）駅まちデザインの５原則 2-15
①多様な主体の連携 ②ビジョンの共有 ③空間の共有
④機能の連携 ⑤一体的で柔軟な運営

3. 駅まちデザインの進め方

■ 構想段階
（1）駅まち空間の関係者の把握と場の構築 3-3
（2）まちづくりの動向の把握 3-5
（3）駅まち空間や地域の課題とニーズの見える化 3-6
（4）ビジョン（まちの理想像）を描く 3-13
（5）グランドデザイン（駅まち空間の形成に向けた基本的な考え方）の共有 3-15

■ 計画・事業化段階
（1）駅まち空間の計画 3-17
（2）計画の実現性の確保 3-34
（3）活用可能な事業手法や支援制度の検討 3-38
（4）プロジェクトの実施 3-39

■ 管理運営段階
（1）一体的な管理・運営 3-42
（2）柔軟な管理・運営と社会実験 3-46

参考１：駅まちデザインを推進する上で役立つツール
（事業手法・規制緩和・支援制度など）

参考２：駅まちが抱える課題と駅まち再構築により期待される効果

駅まちデザイン検討会の実施概要

はじめに

■ 人口減少や少子高齢化に代表される日本の都市の構造的課題に対応し、魅力あるまちづくりを進めるため、「コンパクト・プラス・ネットワーク」施策が進められている。

■ その中心となる機能のひとつに、ネットワークを担う駅を核とした交通結節点がある。交通結節点は、まちの人々が生活する中で自然と訪れる空間であることから、まちづくりに関わる様々な主体にとって利用価値が高いところである。そのため、高度成長期にかけて、多様な主体が、それぞれの視点から交通結節点の開発に携わってきた。

■ しかしながら、整備後数十年が経過し、都市のカタチも変化してきていることも相まって、近年、大都市では著しい混雑等、地方都市では拠点としての機能低下等、というように都市規模の大小にかかわらず、魅力あるまちづくりへの支障となるような事象が生じている。

■ こうした課題に対応しつつ、多様な人々が集まる交通結節点において求められる多様な機能を検討するにあたっては、限りあるリソースを効率的・効果的に活用する視点や、デジタルテクノロジーの加速度的な進展といった社会情勢の変化に応じた、将来の交通結節点の姿がどのようになるのか見通すこと等が求められる。

■ そのため、交通結節”点”や周辺の施設を、それぞれ個別にとらえるのではなく、駅・駅前広場・周辺市街地を「駅まち空間」として一体的にとらえること、そして、様々な関係者が「まちを良くする」視点をもって連携し、「駅まち空間」を将来の魅力的なまちづくりの中核を担う場所とするための取組が重要となる。しかしながら、多様な主体がかかわることから、具体的にどのようなアプローチを採るべきか、判断が困難な状況にある。

■ こうした背景から、令和２年に、駅まち空間に関する有識者等により構成される「駅まちデザイン検討会」での意見交換が進められ、これからの駅まち空間のつくりかたの一助とすべく、この『駅まちデザインの手引き』がまとめられた。先だって令和２年７月に作成された「駅まち再構築事例集」とあわせて、官民を問わず、駅まち空間の再構築にかかわる全ての主体の活動が円滑に進むことを期待する。

■ なお、本手引きでは「駅まちデザイン」を従来の公共交通志向型開発（TOD：Transit Oriented Development）を超える概念として整理し、国外にも広く発信していけるよう、以下のとおり英訳して表現する。

「IDM※ for Attractive Transit Hub ～Beyond TOD～」

※Integrated Design & Management

【注釈】

解 説　本文中の表現について、表や図により考え方や意図等を説明する。

参 考　本文中の表現について、参考となる勉強会や検討会等の資料を示す。

事 例　タイトルや本文中の表現について、駅まち空間等で行われている取組を事例として示す。